

令和7年度 学校教育自己診断 中学校（共通項目）

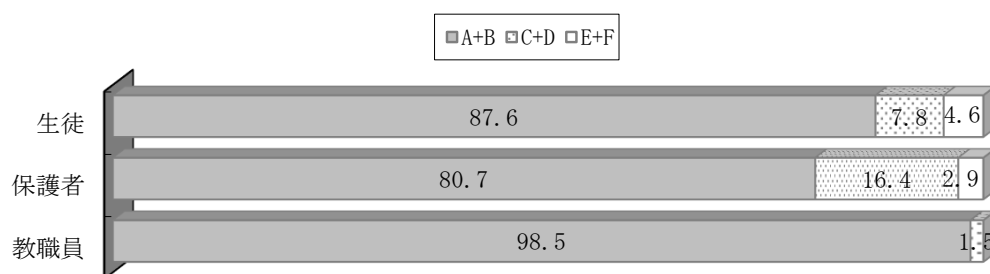
1. 学校の生活について

生徒 学校へ行くことが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くことを楽しみにしている。

教職員 学校では、生徒がいきいきとした学校生活を送れるよう、学校全体で取り組んでいる。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

肯定的回答割合前年度比:生徒-0.1%、保護者+1.3%、教職員-1.5%

前年度比で、保護者の肯定的回答割合が微増し、生徒・教職員では微減した。

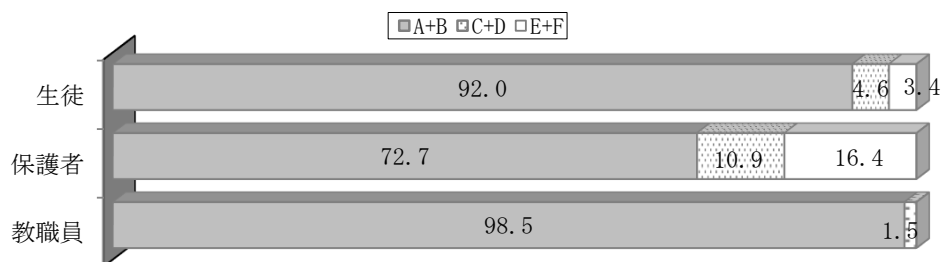
生徒主体の学校運営の推進と、その様子を地域へ積極的に周知したことが、保護者の肯定的回答に繋がったと分析できる。引き続き、全ての回答者において肯定的回答割合が100%となるよう、取組を続ける必要がある。

2. 「確かな学力」の育成について

生徒 先生は、生徒が自ら進んで学ぶことができる授業を行っている。

保護者 学校は、生徒が進んで学習に取り組むよう授業を工夫している。

教職員 学校では、生徒が主体的に学ぶことのできる授業づくりを推進している。



〔分析〕

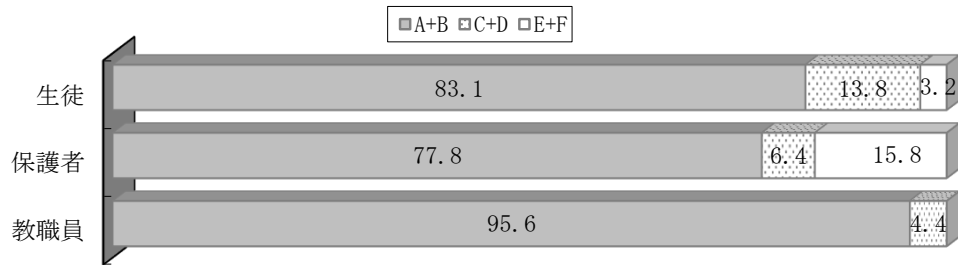
肯定的回答割合前年度比:生徒-1.3%、保護者-3.0%、教職員-0.1%

前年度比で、生徒・教職員の肯定的回答割合が微減し、保護者では減少した。

前年度に引き続き保護者の肯定的回答割合が低く、わからない・無回答が高い結果となっている。引き続き学校での取組内容の発信に努めることと、後に述べるICTの活用や評価についても、たゆまぬ研究を続ける必要がある。

3. ICTの活用について

生徒 一人一台端末(タブレット)を活用した授業は、わかりやすい。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。



〔分析〕

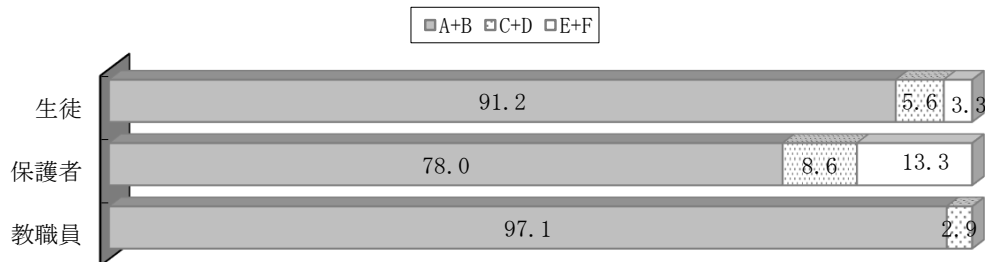
肯定的回答割合前年度比:生徒-7.3%、保護者+0.5%、教職員-3.0%

前年度比で、保護者の肯定的回答割合が微増し、生徒・教職員では減少した。

生徒と教職員という、学校での教育活動において端末を活用する層での肯定的回答割合減少は、重く受け止める必要がある。GiGAスクール連絡会等を通じ、学年や学校全体、学校間での端末活用の好事例収集に努めるとともに、必然性のある学習課題の設定等に関する研究を進める必要がある。

4. 成績・評価について

生徒 学校が出す学習の成績・評価について、納得できる。
 保護者 学校は、子どもの学力や学習状況に対する評価基準を、適切に提示している。
 教職員 学校では、生徒・保護者にわかりやすく、適切な評価基準を提示している。



〔分析〕

前年度質問内容 教職員:学校は～

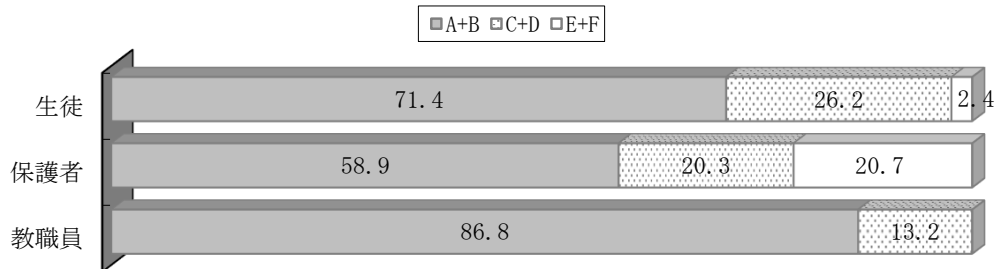
肯定的回答割合前年度比:生徒-3.2%、保護者+2.3%、教職員-1.5%

前年度比で、保護者の肯定的回答割合が増加、生徒では減少、教職員では微減した。

指導と評価の一体化に基づき、「何ができるようになったか」を明らかにすることは、生徒・保護者にとっても教職員にとっても授業改善や学びの自己調整に繋がる重要なポイントである。中学校においては評価が進路に直結することも鑑みながら、透明性のある評価について検討を続けねばならない。

5. 自学自習について

生徒 自分から計画的に学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、自学自習力の育成を推進している。
 教職員 学校では、自学自習力育成のため、全体で取り組んでいる。



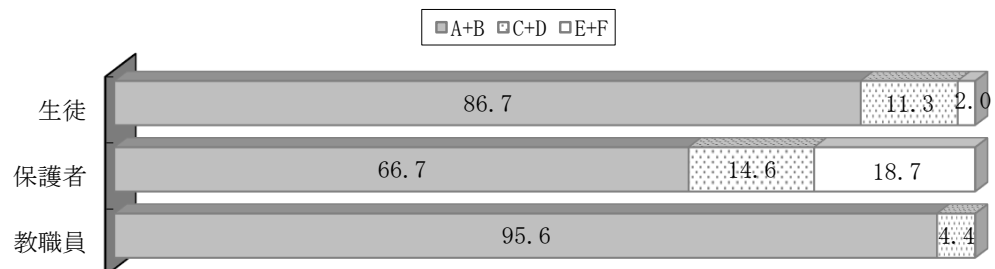
〔分析〕

前年度質問内容 教職員：自学自習力育成のため、学校全体で取り組んでいる。
 肯定的回答割合前年度比：生徒－0.4%、保護者＋0.7%、教職員－3.2%

前年度比で、保護者の肯定的回答割合が微増し、生徒では微減、教職員では減少した。
 教職員における肯定的回答割合の減少は、学校全体としての積極的な取組が行えていないことの証左と捉えることができる。各種学力調査の結果でも、基礎的な知識・技能の獲得が不十分な生徒がいることが分かる。家庭と連携し、自学自習の必要性を周知していく必要がある。

6. 読書活動の推進について

生徒 学校では、朝読書など、読書活動に積極的に取り組んでいる。
 保護者 学校は、読書活動に積極的に取り組んでいる。
 教職員 学校では、読書活動に積極的に取り組んでいる。



〔分析〕

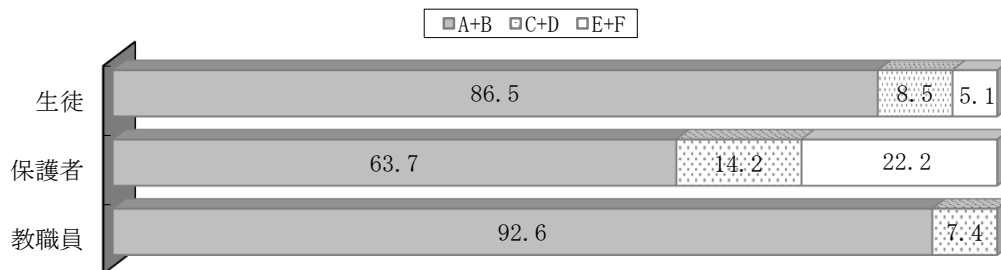
前年度質問内容 保護者：学校では～

肯定的回答割合前年度比：生徒－4.5%、保護者－1.2%、教職員－1.5%

前年度比で、保護者・教職員の肯定的回答割合が微減し、生徒では減少した。
 前問と同様に、全ての回答者で肯定的回答割合が減少していることは、学校を挙げての取組が推進されていないことを指すのではないかと考えられる。学校図書館司書のみならず、司書教諭や担任等、学校全体での読書環境充実に取り組む必要がある。

7. キャリア教育について

生徒 授業や様々な学校での活動の中で、自分の生き方(自分らしさ、他の人や社会とのかかわり、進路など)について、考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、それぞれの生き方(卒業後の進路を含む)について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、生徒が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。



〔分析〕

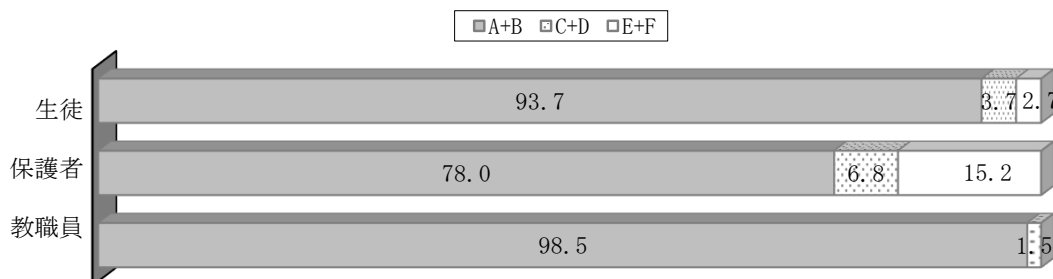
肯定的回答割合前年度比:生徒-3.5%、保護者+1.1%、教職員-4.5%

前年度比で、保護者の肯定的回答割合が微増し、生徒・教職員で減少した。

前年度と同様、保護者の肯定的回答割合が低い状況に加え、新たに教職員の否定的回答割合も高くなっている。対策としては、地域や企業等と協働したキャリア教育の具体的成果を積極的に発信し、教育活動の内容を家庭へより多層的に伝達していく取組が考えられる。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

生徒 学校では、お互いの違いを認め合う人権の大切さや社会のルールについて学ぶことができる。
 保護者 学校は、お互いの違いを認め合う人権の大切さや社会のルール等について学ぶ機会を設けている。
 教職員 学校では、お互いの違いを認め合う人権の大切さや社会のルール等について指導している。



〔分析〕

前年度質問内容 保護者:学校では～

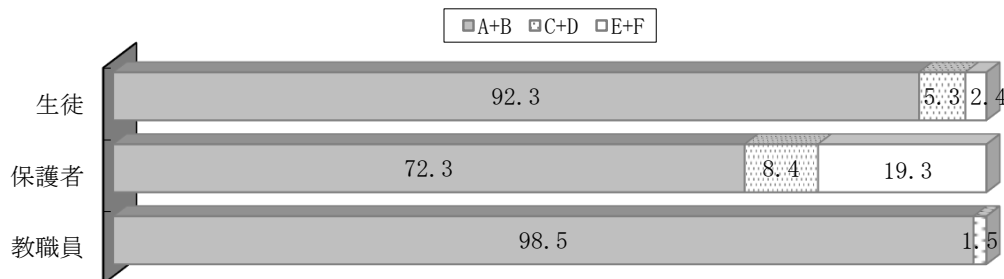
肯定的回答割合前年度比:生徒-2.1%、保護者+1.3%、教職員-1.5%

前年度比で、保護者の肯定的回答割合が微増、教職員では微減し、生徒では減少した。

今後の方策としては、生徒・教職員の高い意識を維持しつつ、日々の道徳教育や規範意識を育てる具体的な指導場面を、通信等で積極的に発信し、学校での充実した取組を周知していくこと等が考えられる。

9. いじめ防止・対応について

生徒 学校では、いじめ防止の取組について学ぶことができる。
 保護者 学校は、いじめ防止・対応について学ぶ機会がある。
 教職員 学校では、いじめ防止・対応の取組を組織的に行っている。



〔分析〕

前年度質問内容 教職員:学校は～

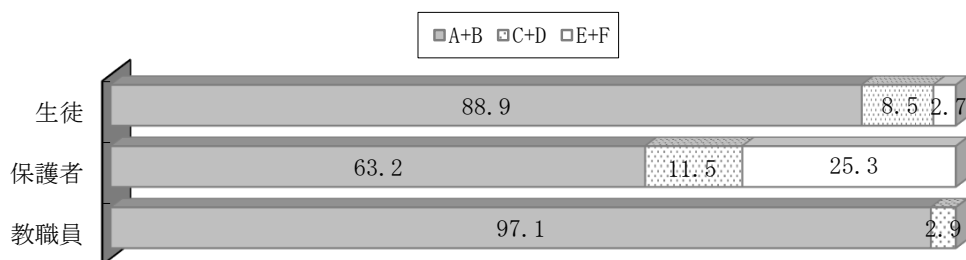
肯定的回答割合前年度比:生徒－1.9%、保護者＋1.7%、教職員－0.1%

前年度比で、保護者の肯定的回答割合が微増し、生徒・教職員では微減した。

いじめ防止に係る予防的な学びの内容を公開するとともに、互いの違いを認めあい、共に育つ教育が学校のあらゆる場面で行われていることを発信し、保護者や地域の信頼を確立する必要がある。また、生徒・教職員についてもいじめ防止を学ぶことが、互いのウェルビーイングに繋がることを意識させなければならない。

10. 「食の教育」について

生徒 学校では、「食」の大切さについて、考える機会がある。(生徒)
 保護者 学校は、「食育」についての取組を推進している。(保護者)
 教職員 学校では、「食育」についての取組を組織的に行っている。(教職員)



〔分析〕

前年度質問内容 保護者:学校では～

肯定的回答割合前年度比:生徒－1.2%、保護者＋0.4%、教職員－1.5%

前年度比で、保護者の肯定的回答割合が微増し、生徒・教職員で微減した。

保護者のわからない・無回答について、依然として高水準となっている。食育基本法の掲げる「生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性をはぐくむため」という食育の目的に立ち返り、カリキュラム・マネジメントの観点を重視した授業改善に取り組む必要がある。